

復活の白球

tadotte@asahi.com

3

戦後復活した「夏の高校野球」の前身の大会で、ボール・ラッシュ米中佐が参加19校の主将に渡した白球のうち二つが、山梨県の清里にあるボーラー・ラッシュ記念館に戻っていた。ひとつは東京高等師範学校付属（現筑波大付属高）に、もうひとつは兵庫県の芦屋中（現芦屋高）に贈られたボールだ。

兵庫県芦屋市に住む田中徹雄さん（83）は、ラッシュ記念館から「ボールを探してくれませんか」と依頼を受けた。芦屋中の野球部員だった田中さん

さんは、ラッシュが開会式で白球を渡した1946年8月の全国中等学校優勝野球大会に出場していた。「白球のことは忘れていました。本当に驚きました」という。

学年が二つ上で主将だった橋本修三さんはすでに亡くなっていたが、妻の絢子さんが遺品からボールを見つけてくれた。白球は2000年春、記念館に寄贈された。

橋本さんは、40年創立の芦屋中に戻り、野球部をつくった中心人物だ。終戦直後の秋、田中さんやエースとなる

有本義明さん（84）ら後輩を集め、練習を始める。神戸一中（現神戸高）との練習試合では、ユニホームはなく、捕手の用具もすべて借りた。46年の兵庫大会は、有本投手と橋本捕手のバッテリードで創部1年もたたないうちに全國大会出場を決めた。まさに

「芦屋の奇跡」だった。
全國大会に向けての合宿で、有本さんは毎日500球投げた。橋本さんはつま先だけ構えて、「ウオー」といふ大声を出した。「橋本さんの気力に押され

橋本修三さん（右）と有本義明さん=有本さん提供



て投げたようなもの。返ってくる橋本さんの球の方が速いんですから。おかげで、なんば投げても大丈夫という自信がつきました」。そうかわり続けた。切れるある批評が印象深い。93年から3年間は福岡ダイエーカーズ（現ソフトバンク）の2軍監督も務めた。プロ経験のない監督は異例だった。「原点は橋本さんと一緒にプレーしたあの大会。橋本さんと出会わなければ、私の野球人生はないかったかもしれません」

「橋本さんの情熱なくてはできないことでした。その気持ち、ひとつは山形に行った。ラッシュの白球には、橋本さんの右に有本さん、左上に田中さんのサインがある。田中さんのサインがある。かつたかもしれない」
ラッシュの白球には、橋本さんの右に有本さん、左上に田中さんのサインがある。ラッシュの19の白球のうち、ひとつは山形に行った。訪ねてみると、ちょっとすてきな話が聞けた。（斎藤勝寿）

すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。